

ライ麦畑の崖のほとりで

古由杏古

僕のベッドの枕元には小さな本立てが置いてある。読みかけの本が何冊かと、ずっと置いたままの本が二冊。

一冊は『新約聖書』僕は特に熱心な信者というわけではない。教会に行ったのはずいぶんと昔だし、第一その聖書はほとんど開いたことがない。

大事なのもう一冊の方、J・D・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』、これが聖書と並べて置いてある。僕が枕元に聖書を置くのは、この本と並べて置いておくためだ。

こんな光景、サリンジャーが見たらきっと呆れて何も言わずにいなくなってしまうだろう。これが僕のバイブルだと象徴する馬鹿馬鹿しいやり方に怒りさえするかも知れない。それでも僕には、こうしておくのが大事なことなのだ。

『ライ麦畑でつかまえて』を初めて読んだのは16歳かそこらだった。

主人公であるホールデンはクリスマス休暇前の学期末で高校を退学になり、両親の暮らすニューヨークへ戻ることになる。学校からの退学通知が両親の元に届くのは水曜日。だがホールデンは、学校や教師や友人、高校生活で彼をうんざりさせた「インチキ」なもの全てにもう耐えられなくなって、土曜日の夜に寮を飛び出してしまう。

列車に乗ってニューヨークに着いたホールデンは、両親に退学が知れる水曜日までは家に帰らないと心に決め、冬の凍えるニューヨークをあてどもなく放浪する。物語はその数日間に彼が経験した様々な人々との出会いを描いている。

僕はいたく感銘を受けて、友人や家族にもぜひ読むように勧めた。読んでくれたのはほんの数人で、同じように感動してくれた人はもっと少なかった。

『ライ麦畑』はホールデンの視点から一人称で書かれている。彼の語り方は理路整然からほど遠く、一つの文にいくつもの出来事や感情がたびたび挿入される。一文がやたらと長いので彼が最初に何を言おうとしていたのか読み手は忘れてしまい、非現実的で極端な比喻やスラングが多くて読みにくい。僕も最初は彼の言葉についていくのがやっとなで、なかなかページが先に進まなかった。読み始めても途中でつまづいてしまう人が多いのは、残念だが仕方のないことかも知れない。

確かにホールデンの言葉や行動には支離滅裂なところがあって、他人からは奇妙に思われることもたびたびだ。その言動が周りとのすれ違いの原因になり、ホールデンは傷ついたり、やるせない憤懣を心に溜め込んでしまう。

でも他人に理解されにくい彼の振る舞いが、ただ人付き合いが下手だからとかひねくれているからだとか、僕はそう思わない。彼の思いが上手く伝わらないのは、ホールデンが表現し、伝えようとするのが非常に言葉にしがたい気持ちだからだ。その気持ちは、僕や彼が出会った人々の中にもある。

ホールデンは自分の話に耳を傾けてくれる、幼いが聡明な妹フィービーに将来なりたいものを聞かれて「ライ麦畑のつかまえ役」になりたいと答える。

ライ麦畑のつかまえ役がどんな仕事かという、そのライ麦畑には千人もの子供たちが走り回

って遊んでいる。ところがその畑の端は崖になっていて、遊びに夢中な子供たちは気づかずに落っこちてしまいそうになる。そんな子供たちをつかまえて、遊びの輪の中に戻してやる。それがライ麦畑のつかまえ役、すなわちキャッチャー・イン・ザ・ライだ。

ホールデン自身、これを馬鹿げた話だと言っている。だがこの夢のような話も、彼にとっては科学者や弁護士になるのと同じように「実際のもの」であり、決して冗談や空想ではない。

気の合う相手と座っておしゃべりをするのも、公園のアヒルたちが池の凍りつく冬になるとどこへ行くのか追求することも、他人にはくだらない暇つぶしでしかなくとも彼の人生には重要なこと。格好つけて女の子とデートしたり、教師の言うことに追従して試験に及第したり、そういうインチキなものよりずっと大切なことだ。それが、ホールデンが他人と分かち合いたい価値観であり、もどかしい言葉を使って伝えたいことなのだと思ふ。

彼がこだわるそういうものは、それほど無価値ではない。誰だって気のいい友達と気持ちのいいおしゃべりをするのは悪い気がしないはずだ。ただ彼以外の人々はそれらをレストランの紙ナプキン程度のものとしか考えていない。それよりも立派な学校を卒業することや立派な友人知人を持つこと、立派な職業に就くことの方が大事だと考えている。その違いがホールデンと周囲との摩擦を生む。

僕自身ホールデンのように、形のないものばかりを大切に生きていくことに一生懸命にはなれそうもない。

だからこそ僕は彼の物語を手放さない。僕が本当に大切に守らなければならないもの、なくしてはならないものを忘れないために、僕は聖書の隣に彼の本を置いている。

「ずいぶん長く考えごとをしているね」

崖っぶちに腰を下ろして考え込んでいた僕は、声の主を振り仰いだ。

「そうかな、ほんの数分だと思っていただけ」

「陽があんなに高くなっているのに、気づかなかったのか」

言われてみれば、東の空にあったはずの太陽がもう南を過ぎて西に傾き始めている。

強い陽射しを受け、麦の穂は黄金色に輝いている。穏やかな風に穂は揺れ、駆け回る子供たちの歓声に混じってさわさわと鳴る。

「本当だ、もうこんなに時間が経ってしまった。そろそろ行かないと」

僕は立ち上がる。眼下には緑や黄色の平原が広がり、もっと遠くには大きな街がある。さらにその向こうには、広大な海の一部がきらきらと光を反射しているのが小さく見えている。

「もう行かないと」

二度目の僕の声は、躊躇いがちに聞こえたかも知れない。

「本当に行くのかい。急ぐことはないじゃないか」

僕は金色の畑を振り返った。たくさんの子供たちが穂の中を行き交っている。僕も少し前まであの輪の中にいた、いや今だってすぐに戻れる気がする。夢中で遊び、歌い、おしゃべりをする。とても簡単なことだったのに。

「ううん、いいんだ。急いでいるわけじゃなくて、ただもう、ここにはいられないって思ったんだ。だから行くよ」

「分かった。なら止めないが、この崖を降りるなら気をつけるんだぜ。掴めるような草は少しも生えていないし、どの石もぐらぐらしておまけに氷みたいに滑りやがるんだ。君が落っこちて頭を割るところなんて、僕は見たくない」

「忠告をありがとう、気をつけるよ。ここは素晴らしいところだった」

僕は握手を求めて手を伸ばした。

「ここは良いところだよ、最高の場所だ」

彼は僕の手を取らず、ハンチング帽を深く被り直して畑の方を向いた。表情は分かりにくいだが、その眼差しは子供たちが駆け回る姿に注がれている。

「ありがとう」

もう一度礼を言って、僕は崖の縁に手をかけた。彼が向こうを向いたまま、軽く手を振るのが見えた。

ちょうどそこまで書き終えた時、アパートの外でクラクションが鳴った。兄の車に違いない。私は書斎の窓を開けて下を覗いた。

「まだそんなところにいたのか、早く降りてこいよ」

派手なオープンカーの運転席で、兄がこちらを見上げている。

しがない小説ばかり書いている私と違って、映画脚本家として大当たりしている兄は羽振りがいい。あの車に乗っているのは初めて見る。きっとまたみんなを驚かせようとしているのだろう。

「すごい車ね、今行くわ」

私はノートを閉じ、書き物机の引き出しにしまった。

この大きな机も元は兄のもので、この部屋は兄の寝室だった。兄が仕事のため家を空けてばかりいるのをいいことに、私はこの部屋を書斎として使わせてもらっている。

玄関には昨夜荷造りをしたスーツケースと革製の旅行カバンが一つずつ置いてある。

スーツケースは夏の休暇中着るための服や靴が詰まっている。旅行カバンの方は、これから会いに行くもう一人の兄への土産でいっぱいだ。

たくさんの本とレコード、それから煙草も少し。母はおそらく兄が煙草を吸うのにいい顔をしないだろうが、最近は兄も元気にしているというから、少しくらいは許してくれるだろう。

かさばる荷物を抱えてエレベータのボタンに手を伸ばしたが、私はそこでふと思い止まって書斎に引き返した。窓を閉め忘れたことに気がついたのだ。

窓にしっかり鍵をかけ、きびすを返したところで私の足は再び止まった。

束の間考えた後、私は引き出しを開け、使い込んだノートを旅行カバンに押し込んだ。

表に出ると、強い陽射しが肌に焼きつくようだった。

「フィービー、いつまで待たせる気だ。日に焼けて真っ黒になってしまう」

後部座席に荷物を放り、私は助手席に乗り込んだ。

「日焼けしたくないなら、どうしてオープンカーなんて買ったの」

兄は他人事のように笑いながら、エンジンをスタートさせる。

「街を出るまでは飛ばさないでよ」

「分かっていると。可愛い妹を怖い目に合わせでもしたら、あいつにこっぴどく嫌われるに違いないからな」

豪快なエンジン音を立てて、車は騒がしいニューヨークの街に乗り出す。

そして私の繊細で気難しい、大切な兄の住む郊外の小さな家を目指して走り出した。

ライ麦畑の崖のほとりで

<http://p.booklog.jp/book/84055>

著者：古由杏古

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kyon0828/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84055>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84055>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ